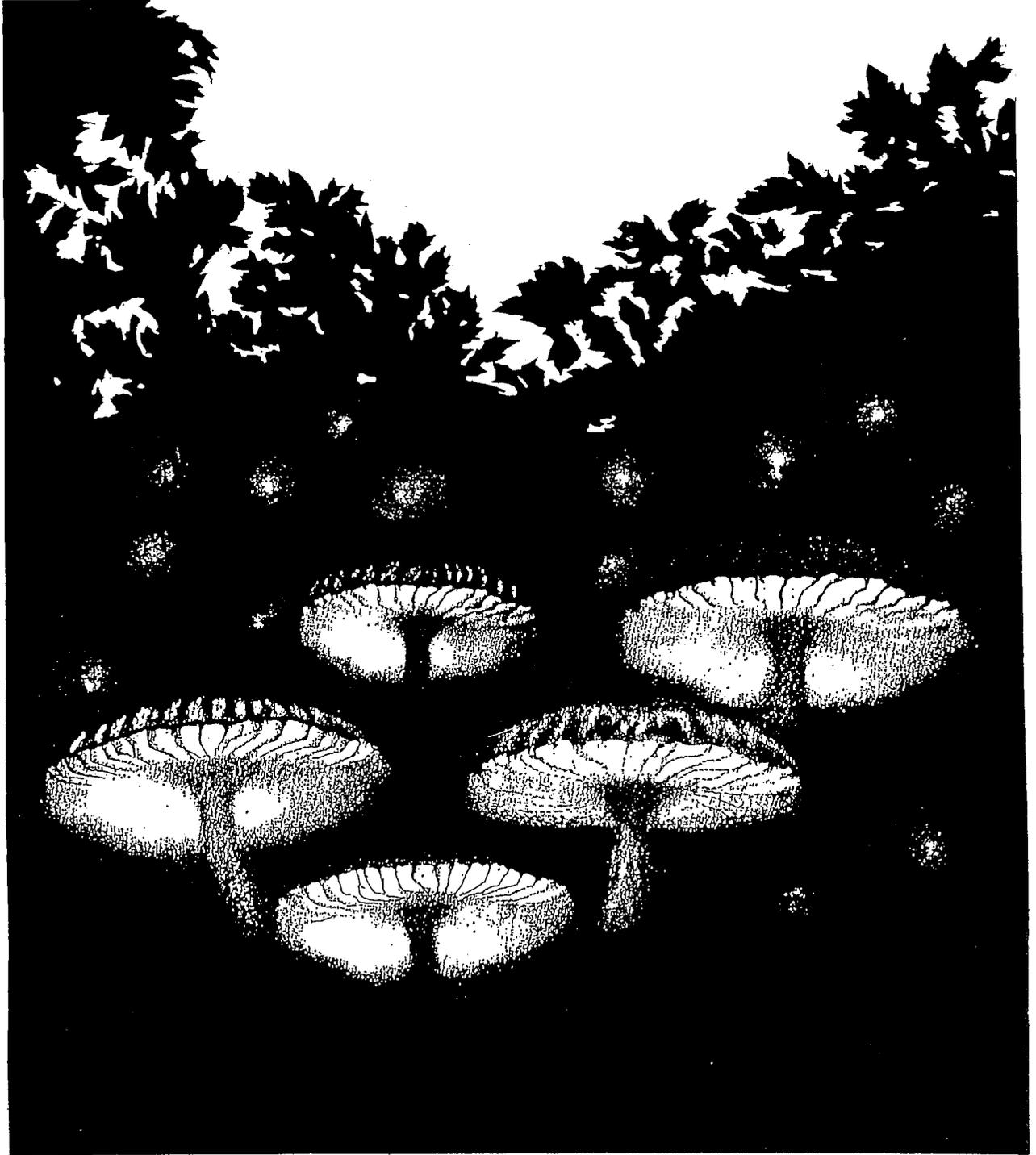


# 関西菌類談話会会報

1990年5月 No.7



## 隣 の 芝 生

鈴木 雄一

花屋の店先にデージーの苗が並ぶ季節になった。ありふれた容姿に足を止めることもなく過ぎてきたのだが、はじめて二株買い求め、戸口において毎日ながめている。西ドイツに半年滞在していたとき、芝生の中に可憐な花をいつも咲かせていたこの花の野性種と出会った。それ以来、僕はすっかりそのとりことなってしまったのである。

ドイツ語でこの花は、ゲンゼブリュムヒェン(Gänseblümchen)と呼ばれている。アヒルノチサナハナとも訳すのだろうか。子供たちにおなじみのメイヤーの辞書で、その項を聞くと、「わたしたちのところの芝生にはどこにでもこの花が生えています。」というくだりが目に入り、芝生の構成員として認められていたのかと、思わずその寛容さがほほえましくなった。全くこの記述のとおり、街路だろうが、訪問したお宅の庭だろうが、研究所の敷地だろうが、この花の見当らない芝生はなかった。遠くからながめると、その花の咲く様子は、ぼつぼつと白い紙くずでも落ちているようで、あまり美しいとは感じられない。ヒナギクというよりは、ハキダメギクというほうが語感としてぴったりしているように思える。しかし、近づいてみると小さいこと以外はデージーそのもので、しばしばなめるように、カメラのレンズを向けた。霜におおわれて咲く姿、春先にモグラのかき出す土の小山の頂上に咲く姿、犬の散歩道での園芸種にも負けない花をつけた姿などは、印象的であった。

あるとき、このような野生のデージー入りの美しい芝生の芝刈りをする機会がおとずれた。外交官として、日本に十年近く滞在したこともある、カール・フォン・ヘルベルト・ベッカー氏のお宅でのごことである。小雨の中、彼は突然、芝刈りをすると言い出した。そして雨合羽を着て、パタパタと軽快に、手廻しの芝刈機を動かしてはじめた。あまりに、気持ちよさそうなので、交代してやってみたが、地面にひっかかってばかりで、腹がたつばかりである。音楽をかなでるように軽快にするものですと叱られた。また、すみからすみまできれいに刈る訳ではなく、木の生え際は残すなど、床屋のような気配りのきいた仕事っぷりでもあった。終わりにになると、刈られた芝は、すみにしつらえてある風通しのよい堆肥箱に納められ、専用の重たいオランダの木靴で踏みかためられた。その後の散歩では、運よく大きなシュタインビルツ(ヤマドリタケ)がとれ、夕食の一皿を飾った。馬の放牧場の前では、秋になると草地に生えるというジャンピニオンの話に、その様子を想像し胸がわくわくした。どちらかといえば、土と離れたところで仕事をしてきたにもかかわらず、この人に、かたひじはらずにじょうずに自然とつきあっているドイツの人たちの片隣を見たように思った。

ところで、日本に帰ると、ゴルフ場における環境汚染問題が社会問題として大きくとりあげられ

はじめていた。緑地の維持が自然破壊をひきおこすという奇妙な問題である。ちょうどその頃、僕の勤務する大学でも、前庭の猫の類ほどの芝生が、まきもしない白クローバーに年々占領されていくために、芝生保護の立場から除草剤が使用されることになった。僕は環境汚染を防ぐのは足元からと、いや日頃家畜たちがお世話になっているクローバー保護の立場から、無い知恵をしぼって反論してみたが、大方の同意を得るには至らなかった。無責任に生態的管理をすべきだなどと言い放ってしまったが、栄養生理的性質、たとえば、ミネラルの要求性、窒素やpHへの反応性などの全く異なるイネ科植物とマメ科植物をいかに共存させていくかは、すぐれた牧草生産のために生み出された技術である。したがって、その過程で得られた知見を逆に応用することがひとつの生態的管理の可能性と考えられ、実証する必要がある。最近、芝草学の草分けである眞木芳助氏が、戦後まもなくウィスコンシン大学で勉強をはじめられた頃に、草資源ということばに畜産的な役割だけでなく緑化というもうひとつの役割があることを知ったときの驚きを記していた。これを読んでからはじめて、僕もまた芝生が「草地」であったことに気が付いた。氏が言っているような「遠くから見て青く、近くに行けば雑草が混じっているが全体としては芝生の体裁が整っているような芝生」を認める心のゆとりがあるかどうか、農業是非論の前に問題なのではないだろうか。

それにしても、隣の美しい芝生は、どのようにしてできていたのだろうか。ドイツでは芝刈りが頻繁になされること以外は、人が芝生に何かをしているのを目にすることはなかった。街路の芝生は、犬の落としものをたっぷりと食べて実にあざやかな緑色をしていたし、太ったヒナギクを住まわせていた。ブラウンシュバイクの農業研究所の芝生は、小ぶりではあったが、つらなる広大な森の植生の一部として、微生物から動物まであらゆる森の住人たちによって、はぐくまれているようにみえた。自転車をこぎながら、きのご捜しができる場所であり、落葉の季節には、大きな扇風機のような掃除機が、吸い込むのではなく逆に芝生の上に堆積した落葉を森の中へと吹きとばしていた。ショプフティントリング(ササクレヒトヨタケ)が芝生に林立し、ビオレッター・レーテルリッターリング(ムラサキシメジ)が落ち葉の上にあちこちで菌輪を描いているのを目にしていると、落葉にはじまる芝生への養分の流れが見えるように感じた。春先のモグラのところまわらない耕うんも、土壌の通気性を回復することに役立っていたことであろう。

夜になると人口のほうが少ない研究所の森を遠慮がちに自転車をこいでいたときに、シカ、ハリネズミ、ウサギなどの動物たちに出くわすたびに、さまざまな想像が頭の中をよぎった。

隣の芝生は、それ自体を作るためにではなく、

美しい街路や森の木立ちを維持していることの副産物として存在しているように僕には思えた。芝刈りや堆肥作りを楽しんでいるようにさえ見えるドイツの人たちの芝生とのつきあい方は、いつに

なっても「豊か」になれない僕たちと、西洋文化の表面的な輸入に対する痛烈な批判のように感じられてならない。

## きのこ展回想記

吉見昭一

1989年10月1日から半月間わたるきのこ展が、京都府立植物園・京都園芸倶楽部・関西菌類談話会の共催により、植物園の会館展示場で開催された。

開催にあたっては、きのこ展のメインテーマを「きのこ森林」とし、展示内容を(1)展示、(2)講演、(3)相談、(4)即売の4分野に分けて検討し、有機的に結合させて運営することにした。

展示については、きのこの分類、栽培、毒きのこ、民芸、料理、図書の7コーナーに分けた。そして生のきのこ、ジオラマ、写真、図表・解説のパネル、標本、点滅指示板等によって入館者にメインテーマを訴えることにした。人目をひくジオラマは会場の中央部に置き、アカマツ林内のマツタケの発生状況とクヌギ・コナラ林の生態を擬似的に表現した。外国産のマツタケ近縁種は液浸標本や写真による展示をした。

栽培きのこに関しては、農協の長野県連より5日毎にヒラタケ、ナメコ、ブナシメジ、エノキタケを送って頂いたり、奈良県の中谷光男氏からは特大のマンネンタケを、京都市の森本肇氏からはマッシュルームのブラウン種、ホワイト種を提供して頂いた。

そのほかに、きのこをデザインにした身近な生活用品、例えばアクセサリ、切手、台所用品、おもちゃ、文房具、刺繍、きのこ染めなど、また、きのこを使った日本料理や西洋料理の調理法、缶詰、漬物、水煮なども展示・紹介した。内外のきのこ関係の図書100冊以上も展示した。

講演は1回につき1時間をつかい、内容をかえて7回行った。会場が狭く聴講希望者が会場からあふれ、遠来の方々の一部に迷惑をおかけした。開催順に演題と演者を列挙すると、「やさしいきのこの観察」：上田俊穂、「きのこの栽培」：山中勝次、「菌根性のきのこ」：本郷次雄、「マツタケ学」：小原弘之、「毒きのこ」：横山和正、「きのこの世界」：井坪豊明・森本繁雄、そして「たのしいきのこ採集」：吉見昭一であった。講演レジュメも配布した。

きのこに関する相談・質問コーナーは当初7回予定していたが、連日質問攻めで、結局毎日開設した。いろいろなことを尋ねる方が多く、汗だくであった。

自由観察コーナーは、生のきのこを手にとって匂い、硬軟、形状の違い等を体験する場所となり、小、中学生だけでなく大人の興味、関心を高めるのにも役立った。

即売のコーナーでは、きのこ関係の図書、きのこ展記念のTシャツ、美山町特産のナメコの缶詰などが販売された。Tシャツのキノガサタケのデザインは、丸西靖恵会員によるもので好評であった。

入場者は約24000人であった。関東、九州などからはるばる来場された方々、何回も来場され熱心にメモを取られる方、来場の都度、採集した沢山のきのこを手土産にと置いていかれる方々もおられ、関係者に感動を与えた。日曜・祝日は場内が身動き出来ない時もあり、苦情を聞くことしきりで、会場整理が大変であった。

会場のスナップの内、心に残るいくつかを紹介すると……瓶栽培のきのこの日々の変化を毎日見に来られるお年より、マツタケの香を嗅ぐとジオラマに鼻をよせる若い女性、会場で偶然聞いたイカタケ、スッポンタケ、ツマミタケの姿と臭気に驚異の声をあげた生徒達、生れて初めて見た冬虫夏草に吸い寄せられた老人の横顔、きのこ染めをショーケースから出して見せるとせがむ女性、「ウーン」とうなってトリュフに見入る中年の男性、テングタケ、ツキヨタケ、ドクツルタケの生の姿を見て「本当にあるんだなあ」とつぶやく若もの、「このきのこはカレーの臭いだ」と叫ぶ小学生等々の姿や声が脳裏からいつまでも消えない。

このような大盛況の原因の一つは、会期中につねに生のきのこを場内狭しと展示したことによるのではなからうか。展示されたきのこは延べ約370種に及ぶのである。

また、植物園の技術者による立派なジオラマ作成と会場設営、京都園芸倶楽部会員による樹木の提供や採集協力、そして関西菌類談話会会員の様々な分野での大きな協力が実を結んだのであった。雨天も休みなく、近畿一円から集められたさまざまな量のきのこ、それらを同定する係、相談係、会場整理係、庶務係、採集係等延べ人数で416名の方々の実務提供があったからである。

「こんなきのこ展が毎年あったらいいのになあ」とおっしゃる方がいるが、これだけ大がかりなきのこ展は、毎年容易に出来るものではない。何年間かの間隔をあげた上、愛好家、研究家のボランティアに支えられてこそ出来るものであろう。今後多くの人々にきのこという生物を正しく理解し、生活に取り込んでもらうための、先導的なきのこ展の開催を提唱しながら筆を置く。

# きのこ栽培研究ノートから

## —ブクリヨウ栽培の試み—

藤田 博美

ブクリヨウとは

漢方薬として広く使われているブクリヨウ (Wolfiporia cocos) は、ヒダナンタケ類、タコウキン科 (サルノコシカケ科)、ブクリヨウ属のきのこで土壌中に菌核を作る。きのこは、菌核の表面に稀に発生するという。一時、テレビのコマーシャルでブクリヨウ配合の〇〇漢方胃腸薬と宣伝されていたことを思い出す。

漢方薬として、単剤で使用されることは少ないが、他の漢方薬と混合して用いられる場合が多い。たとえば、茯苓散、五苓散、苓桂朮甘湯、六君子湯、四君子湯等の重要な処方によく配合されているという。

本菌の分布は、日本、韓国、中国、北米等といわれている。わが国のブクリヨウは、通常アカマツの根に発生するが、北米ではマツ属、モミ属、コナラ属、モクレン属、ミカン属等の根に生ずるといわれている。

### 発生生態

数年前、晩秋の頃、王子製紙の方々と京都府林業試験場の研究員、総勢10人でアカマツ林に発生するブクリヨウの生態調査を試みたことがある。最初は、試しに昔ながらのブクリヨウ突きをやってみようというので、金属性の棒で土壌を突き刺してみたが、その感触は石に当たったものか、捜し求めるブクリヨウに命中したものか、皆目見当がつかずこの方法では名人でもなければ無理という結論に達した。そこで私達は、調査地で各人各様にブクリヨウ探しを行った。その結果、ブクリヨウについて次のようなことが明らかになった。

1. 林齢60年生のアカマツ林の伐採後、5年経過したところに発生していた。
2. 乾燥した南傾斜に発生し、土壌のpHは4.5~4.8の弱酸性であった。
3. アカマツの枯れ株の斜面下方、約1.5mのところに集中発生していた。
4. 土壌中の深さ10~30cmのマツの根に塊状に菌核を作っていた。
5. 探り当てた個体は約30個で、発生密度はたいへん低いものであった。

6. 形は、球形のものから長円形や卵形等多様であった。
7. 菌核の外皮は、マツの根のコルク皮を残し、赤褐色~暗褐色で裂け目があった。
8. 菌核の内部は、白色~淡紅色であった。
9. 菌核の内部は組織培養し易く、PDA 倍地でも生長が早かった。

### 栽培の試み

ブクリヨウは、わが国では中部、近畿、中国、九州地方に多く産出していた。しかし、近年、国産品は特に少なくなり、ほぼ100%韓国や中国から年間約200トン輸入され、需要をまかなっているという。従って、本菌の栽培化が急がれていることはいうまでもない。

中国では、ブクリヨウの人工栽培に着手しているといわれているが、その方法については不明な点も多い。

私達は、次に示す3つの方法で栽培を試みた。培養菌は新鮮なブクリヨウの菌核から大量に組織培養したものをを用いた。

まず、第一の方法は、長さ1mに玉切りした健全なアカマツ、マツクイムシ被害木及び立ち枯れ木にチェーンソーであらかじめ深さ7cmの接種溝を作り、そこへ菌を接種した。

第二の方法は、50年生のアカマツ林の立木を伐採した後、根系にドリルで穴をあけ、菌を接種した。

第三の方法は、長さ25cmのアカマツを太さ3cmの短冊状に切ったものを約20本束ね、P.P袋に入れ殺菌後、菌を接種した。

なお、第一及び第三の方法は、いずれも接種後クロボク土、アカマツ林土壌、マサ土等に埋め込み繁殖を図ろうと考えた。このような方法は、1990年3月に試みたもので、今後とも経過を観察したい。

以上、ブクリヨウの発生生態とその栽培の試みの一端を紹介した。本菌の栽培は、アイデア勝負だと思う。ブクリヨウの栽培化によって、マツタケやホンシメジ等の有用食用菌が発生不可能なアカマツ林の高度利用につながれば幸いである。

## 毒きのこ再考

川上 嘉章

外国には毒きのこだけを扱った本が何冊かあるが、そのうちの1冊 (Poisonous Mushrooms of the Northern United States and Canada) を見ているうち、日本と少し異なっている点があったので、そのあたりを抜き出してみようと思う。なお、日

本にも毒きのこだけを扱った本が1冊あるが、すべてが網羅されていない。

ここでは、毒きのこの中でも最も中毒例の多い、胃腸障害を起こす仲間についてのみ注目してみたい。この仲間は全部で83種があげられているが、

和名がついているのは44種である。しかし、これらは必ずしも日本では毒きのことされていないのである。それらは以下のように4つのグループに分けられよう。

(1) 日本でも毒きのことされている種類 7種  
これは当然の事のようにだが、これらのうちヒダハタケとサクラタケは古い図鑑では食用となっているのである。毒成分の研究がなされるにつれわかってきたものだが、これからは毒きのこの数は増加するものと思われる。

(2) 日本では食毒不明とされている種類 17種  
日本にはまだまだ毒きのこ予備軍がたくさんあるようだ。

(3) 日本では食用となっている種類 15種  
この中で注目すべき点は、食用にされているが人によっては中毒するというきのことして、ナラタケ、アミガサタケ、トガリアミガサタケをあげていることである。あの人はどんなきのこを食べても当たらん(中毒しない)よと言ったりするが、人の体質によって中毒したりしなかったりするというのは、まんざらうそではなさそうに思える書き方である。なおナラタケには生食すると中毒する成分が入っていると最新の日本の図鑑に書かれている。

欧米では、日本と食習慣が異なり、野菜を生で食べるのと同じような感覚で野生きのこを生で食べるらしい。日本では、焼いたり煮たりすることにより毒成分が分解したり、水溶性であれば煮汁に出てしまうといったことで食用とされているものがいくつかあると思われるが、これは危険もはらんでいる。不十分な調理によって毒成分が残る

ことも考えられるためである。

上記以外に、コガネタケ、ヤケアトツムタケ(身近く中毒された人あり)、スギタケ、ハイイロシメジ、ヒロヒダタケ(図鑑によって食毒が異なっている)、マスタケ、クロノボリリュウタケ、モリノカレバタケ、キチチタケ、シロオオハラタケ、ハラタケモドキ、オオウラベニイロガワリがある。これらのきのこを食べられる時は注意した方がいいように思う。

(4) 日本では何らかの処理をすれば食用となる種類 5種

ドクベニタケは古い図鑑では食用となっている。しかし、最近では、生食は中毒するが辛味を除けば食用となっている。ウスタケは毒成分を含むが煮こぼせば食用となっているが、古い図鑑では単に食用となっている。ケシロハツ、ツチカブリ、アオゾメツチカブリは辛味のある乳液をとれば食用となっている。

新しい毒成分が解明されるにつれ、食用から毒にかわっていくものが、これからいくつかでてくることが予想される。

食用きのこにも毒成分が含まれていたり、毒きのこでも少量なら食べられたり、食毒の境界線ははっきりしていません。

毒成分が少しでも含まれていたり、人によって中毒することがあるきのこはすべて毒きのことし、毒きのこでも何らかの処理をすれば食べられるものもあるといった書き方にしていくべきではないだろうか、などと思ったりする今日このごろです。

## 関西菌類談話会 1989年度総会(第272回例会)報告

日時 1990年2月3日(土) 14:00~15:00

場所 吹田市民会館(吹田市出口町)

司会 藤田博美氏

出席者数 49

1 開会宣言(藤田博美氏)

2 挨拶 土倉亮一会長

3 議長選出 藤野直也氏を選出

4 書記選出 北岸阿佐子氏を選出

5 議事

《1989年度事業報告・会計報告・その他の報告》

A 事務局からの報告:事務局担当の上田俊穂総務幹事が修学旅行付添いのために欠席につき、横山和正運営幹事が代理で報告し、了承された。(別紙1)

B 1989年度行事報告:集会、採集会について下野義人庶務幹事が一括して報告し、下記の補足説明2点と共に了承された。(別紙2)

(補足:採集会について)下野義人庶務幹事

●265回例会(近江神宮)朝から雨が降っていて、解散時にあがる。クモタケを中心とした冬虫夏草が多く採集された。

●266回例会(伏見稲荷)遠方からの参加者もあり、盛会であった。イグチ類、ベニタケ類が多かった。

●267回例会(朝日の森)7月下旬~8月上旬に降雨が少なく、採集量も種類数も昨年にくらべて少なかった。(122種)

●268回例会(箕面公園)大阪に大雨洪水警報発令下での採集会であった。ニセクロハツ、アジナガイグチ

など、当地で初めてのきのこが採集された。

●269回例会(大文字山)雨が降ったり止んだりという天候だった。夏のきのこが多かった。

●270回例会(岩倉)きのこ展の影響で参加者が多かった。

マツタケモドキ、クロカワなどが採集された。

(補足:きのこ展について)吉見昭一きのこ展実行委員長

●実行委員会を7回開いて企画した。24000人を超える入場者は、近年のきのこへの関心の高まりを示すものであるが、その以上に会員の実働により提供された生のきのこが、来場者に与えた影響は大きい。

●きのこ展で独自に販売したTシャツの収益から、「原色日本新菌類図鑑Ⅰ・Ⅱ(保育社)」と「日本のきのこ(山と溪谷社)」を購入し、これらと55,466円とを関西菌類談話会に寄附した。

●会員への協力のお礼。

C 会報編集委員からの報告:森本繁雄会報編集委員長が選参するので同編集委員の佐々木久雄氏が代理で報告し、下記の補足と共に了承された。(別紙3)

(補足)●会報No.5について、業者(橋本印刷)の都合で遅れたことの説明とお詫び。

D 会計報告:(1)寺下隆夫会計幹事より1989年度決算報告がされ、下記の補足と共に了承された。(別紙4)

(補足)●雑収入の中には、きのこ展からの寄附金、朝日の森採集会の余剰金(35,498円)、本郷次雄先生からの寄附金(10,000円)が含まれる。

- 支出の中の会報印刷費が、予算110,000円に対して54,590円となっているのは、会報No. 6分の中西印刷からの請求が遅れ、次年度まわしとなったためである。
- (2) 寺下隆夫会計幹事より1989年度特別会計の決算報告がされ、了承された。(別紙5)
- E 会計監査報告：愛甲軍雄会計監査委員より、関西菌類談話会1989年度会計報告に間違いがないことが報告され、了承された。(別紙6)  
《1990年度事業計画、会計予算案、その他の審議》
- A 1990年度行事計画について：下野義人庶務幹事より、「1990年度 関西菌類談話会行事予定(案)」が提案され、下記の補足と共に了承された。(別紙7)  
(補足)●第277回の「宿泊を伴う採集会」については、8月上旬(4, 5, 6日あたり)2~3泊の予定で企画中である。
- B 1990年度会計予算について：寺下隆夫会計幹事より、「関西菌類談話会 1990年度予算案」が提案され、下記の補足と共に承認された。(別紙8)  
(補足)●事務費、会場費、振替手数料は物価高のおり、上がるものとして昨年度より高く見積もった。  
●会報印刷費の増は会員増ともなう増加である。  
●予備費は採集会の調査費用などを含んで見積もった。
- C 1990年度会報発行について：佐々木久雄編集委員長代理より「会報発行計画」が提案され、下記の補足と共に承認された。(別紙9)  
(補足)●投稿が少なく、願うして集めている状況なのでふるって投稿をおねがいます。
- D 会則改定について：横山和正総務幹事代理より「関西菌類談話会会則」第2条が、第4回役員会の決定通り提案され了承された。〔事務局報告(別紙1のA)〕
- 6 閉会挨拶 土倉亮一会長

別紙1

1989年度事務局報告

1990年2月3日(土)

- ア. 1983年以来の事務局の所在地が財団法人発酵研究所から、大阪府立島本高等学校に変わった。  
上記に伴い、会則2条の改定案を第4回役員会で決定した。  
改定部分：【旧】532 大阪市淀川区十三本町2-17-85  
財団法人発酵研究所  
真菌研究室内 Tel 06-302-7281  
【新】618 大阪府三島郡島本町桜井台15-1  
大阪府立島本高等学校内  
Tel (呼) 075-962-3265
- イ. 1989年4月1日付で会長委嘱により、1989, 1990年度の役員を決定した。  
その後、同年5月21日(第1回役員会)で一部改正した。

会 長	土倉亮一	会務総括
副 会 長	空席	会務総括(会長補佐)
総務幹事	上田俊穂	事務局(入会、入金等の受付事務一般、会務一般)
会計幹事	岩瀬剛二	会費事務(会員別会費納入記録・請求)
庶務幹事	寺下隆夫	納入事務(会計帳簿記録・管理)
	下野義人	採集会事務
	横山竜夫	集会事務・会員名簿
運営幹事	横山和正	(採集会総括責任者)
	岩瀬剛二	
	森本繁雄	(会報編集委員長)
	山中勝次、井坪豊明、丸本龍二、森本 肇、橋屋 誠、佐々木久雄、衣田雅人、藤田博美	(集会総括責任者)
	鈴木 雄一、北岸阿佐子	

編集委員 井坪豊明

橋屋 誠、山中勝次、丸西靖恵、佐々木久雄

会計監査 愛甲軍雄、志水杏子

- ウ. 1989年5月21日、7月8日、9月2日、11月25日、1990年1月15日に役員会(計5回)を持った。
- エ. 10月1日(日)から15日(日)まで、京都府立植物園、財団法人京都園芸倶楽部と共催で「きのこ展」を開催した。  
入場者：24000人以上、会員の協力：延べ416人、展示した菌類：369種(品種、変種も1種とみなす)
- オ. 会員への発送
  1. 年間計画書、分類学講座案内、事務局移転のお知らせ。
  2. シンポジウム案内、朝日の森採集会の案内。
  3. 関西菌類談話会会報 No. 5
  4. きのこと展の案内、入場券。(京阪神地方の会員のみに、きのこと展の各係の協力要請の依頼状を別途発送した)
  5. 関西菌類談話会会報 No. 6、会費納入のお願い、振込書。
  6. 総会・講演会の案内
- カ. 1989年度の会員についての報告【庶務幹事(会員名簿担当)の代行】(1989年12月31日現在)
 

A : 1989年度4月に前事務局より引継いだ会員数	= 463名
B : Aの内、1989年度の新入会員数	= 12名
C : 引継ぎ後の新入会員数	= 36名
D : 引継ぎ後の退会者数	= 4名
E : 会費滞納により退会したとみなされた会員数	= 12名
F : 住所不明の会員数	= 7名
年度末の会員数	= A + C - (D + E) = 476名
実質の会員数	= 476 - F = 469名
1989年度の新入会員数	= B + C = 48名

別紙2

1989年関西菌類談話会行事報告

1990年2月3日

世話人氏名 敬称略・順不同

氏名右肩の°は世話人代表者を表わす。

- 263回 5月20日(土)分類学講座(第14回)、参加者 40名  
場所 京都府勤労会館  
演者 本郷次雄  
内容 菌根性ハラタケ目。  
世話人：吉見昭一°、上田俊穂、森本繁雄、橋屋 誠、井坪豊明。
- 264回 6月17日(土)シンポジウム、参加者 46名  
場所 京都府立教育文化センター  
内容 菌根菌研究の現状と展望。外生菌根菌の進化(小川真)、菌根菌の生態とその栽培法の試み(藤田博美)、マツタケ近縁種の菌糸細胞と呼吸鎖の特徴(岩瀬剛二)、菌根性きのこの胞子発芽条件(太田 明)。  
世話人：岩瀬剛二°、山中勝次、下野義人、藤田博美、丸本龍二。
- 265回 7月9日(日)近江神宮採集会、参加者 31名  
近江神宮の奥の鳥居の前(10:30)。シイ、カンシ。世話人：太田 明°、本郷次雄、横山和正、大西裕司。
- 266回 7月30日(日)伏見稲荷採集会、参加者 46名  
伏見稲荷大社前参集殿前集合(10:30)。シイ、カンシ。世話人：橋屋 誠°、森本繁雄、吉見昭一。
- 267回 8月24日(木) — 8月26日(土)

朝日の森採集会（2泊3日），参加者 42名  
 場所 朝日の森（滋賀県朽木村），アカマツ，コナラ林。  
 世話人：井坪豊明，森本繁雄，上田俊穂，丸西靖恵，北岸阿佐子，横山和正，大西裕司，衣田雅人，佐々木久雄，橋屋 誠。

268回 9月3日（日）箕面公園採集会，参加者 5名  
 阪急箕面駅前（10:30）。シイ，カンナ。  
 世話人：上田俊穂，竹田富久雄，丸本龍二。  
 269回 10月8日（日）大文字山採集会，参加者 34名  
 八坂神社境内（10:30）。アカマツ，コナラ林。  
 世話人：吉見昭一，佐々木久雄，森本繁雄。  
 270回 11月5日（日）岩倉（尼吹山）採集会，参加者 61名  
 実相院バス停付近集合（10:30）。アカマツ，コナラ林。

世話人：相良直彦，加藤景生，菊池淳一。  
 271回 12月17日（日）スライド大会，参加者 55名  
 10:30-16:00 京都市左京区田中樋口町1 田中神社弘安殿。  
 世話人：上田俊穂，相良直彦，吉見昭一，井坪豊明，丸西一枝，佐々木久雄，大西裕司，森本繁雄，若林万里子。

272回 2月3日（土）総会および講演会，参加者 49名  
 場所 吹田市民会館（吹田市出口町4-1）  
 演題（演者） 1. 数種の日本地下性菌について（吉見昭一） 2. 新食用きのこ，トキイロヒラタケ（*Pleurotus salmoneostramineus*）の未利用資源利用型栽培の例（中島優子，鈴木雄一），3. 御所の菌類の生態，特に，チャタマゴタケについて（下野義人，佐々木久雄）  
 世話人：藤田博美，山中勝次，岩瀬剛二，下野義人，丸本龍二。

1. きのご展 京都府立植物園において，10月1日から10月15日の長期間にわたりきのご展を開催し，入場者24000人を超えた。直接採集，運営にあたった会員延べ416名。内容，きのごの分類，栽培，食用，毒のきのこ，マツタケの生態，料理，民芸品，図書コーナー：マツタケ山，シイ，コナラ林のきのこの生態ジオラマ：きのごの相談会，講演会など，当会 植物園 京都園芸倶楽部の共催で行われた。

2. 本会が菌根研究会に協賛し，8月29日に京都リサーチパークでマイコリザセミナーをおこなった（VA 菌根の利用，演者 J. R. Bagyaraj, N. Kobayashi）

別紙3

編集委員会報告

第5号 8ページ 550部 B5（橋本印刷）89年6月1日発行  
 表紙絵 キッタリア 絵 大西裕司氏 解説 横山和正氏  
 総会報告，会則，事務局および編集委員会からのお願い  
 生産物の命名法（奥田 徹氏）  
 ヨーロッパの栽培きのこ研究所めぐり（衣田雅人氏）  
 きのご…食べる趣味（村川武雄氏）

第6号 8ページ 550部 B5（中西印刷）89年10月30日発行  
 表紙絵 絵 伊勢信子氏 表紙によせて 森本繁雄海生子の菌について（土倉亮一氏）  
 アンモニア菌の生理—その研究経過（鈴木 彰氏）  
 アミタケとオウギタケのであい（小川 真氏）  
 京都御苑のきのこ（佐々木久雄氏）

竹林にて（四手井淑子氏）  
 凍結乾燥を用いたキノコの乾燥標本への試み（山東英幸氏）  
 役員表，編集委員会からのお願い

別紙4

関西菌類談話会1989年度決算報告 1990年2月3日  
 《収入》 単位：円

項目	予算額	決算額
繰越金	762,395	762,395
会費（400×1,000）	400,000	459,000
会場費	40,000	48,170
雑収入	60,000	122,484
計	1,262,395	1,392,049

《支出》 単位：円

項目	予算額	決算額
通信費	250,000	247,136
事務費	40,000	68,391
会場費	50,000	31,800
会議費	60,000	19,440
印刷・コピー代	50,000	7,670
謝礼	60,000	3,000
会報印刷費	110,000	54,590
会報刊行諸経費	20,000	13,300
振替手数料	1,000	555
雑支出	20,000	1,911
予備費	20,000	0
事業準備金（定額貯金）	100,000	100,000
支出合計	781,000	547,793

《繰越》

次年度繰越金 844,256  
 （別途に30万円の貯金）  
 会計幹事 寺下 隆夫

別紙5

関西菌類談話会1989年度特別会計決算報告 1990年2月3日

故 浜田 稔博士記念出版事業寄付金  
 （同志社女子大学小原会計担当）

〔収入〕（前年度繰越金） 100,000  
 〔支出〕  
 〔差引残高〕 100,000

次年度（1990年度）繰越金 100,000  
 小原 弘之  
 会計幹事 寺下 隆夫

別紙6

関西菌類談話会平成元年度会計監査報告

会計幹事より提出された現金出納帳簿，会費納入原簿，諸経費支出に伴う領収書等の会計書類に基づき監査を行った結果，平成元年度会計報告が正しい事を認めます。  
 平成2年2月3日

会計監査 愛 甲 軍 雄<sup>Ⓜ</sup>  
 会計監査 志 水 杏 子<sup>Ⓜ</sup>

別紙7

1990年度関西菌類談話会行事予定（案）

1990年2月3日  
 世話人氏名 敬称略・順不同

- 273回 5月13日(日)分類学講座(第15回)(10:00-12:00)。  
 場所 滋賀大学視聴覚教室。  
 演者 演題未定  
 世話人: 藤田博美<sup>○</sup>, 横山和正, 山中勝次, 森本繁雄, 橋屋 誠, 吉見昭一, 下野義人, 丸本龍二。  
 \*詳細は別紙にてお知らせします。
- 274回 6月16日(土)シンポジウム  
 場所 演者未定。  
 内容 きのこ栽培の現状と将来展望(予定)  
 世話人: 藤田博美<sup>○</sup>, 山中勝次, 下野義人, 丸本龍二, 岩瀬剛二。  
 \*詳細は別紙にてお知らせします。
- 275回 7月8日(日)三井寺裏山採集会  
 大津市役所前(10:30)。シイ, カシ林。  
 世話人: 横山和正<sup>○</sup>, 本郷次雄, 太田 明, 大西裕司, 橋屋 誠。
- 276回 7月29日(日)榎原神宮採集会  
 榎原神宮の正面大鳥居前集合(10:30)。シイ, カシ林。  
 世話人: 衣田雅人<sup>○</sup>, 山中勝次, 渡辺和夫, 中谷よし子。
- 277回 日時 世話人未定  
 \*詳細は別紙にてお知らせします。
- 278回 9月2日(日)箕面公園採集会  
 阪急箕面駅前(10:30)。シイ, カシ林。  
 世話人: 上田俊穂<sup>○</sup>, 橋屋 誠, 丸本龍二, 下野義人。
- 279回 10月14日(日)上賀茂試験地採集会  
 京都大学農学部付属演習林上賀茂試験地(10:30), アカマツ, コナラ林。  
 世話人: 加藤景生<sup>○</sup>, 吉見昭一, 佐々木久雄, 菊池淳一。
- 280回 11月11日(日)岩倉(尼吹山)採集会  
 実相院バス停付近集合(10:30)。アカマツ, コナラ林。  
 世話人: 相良直彦<sup>○</sup>, 加藤景生, 藤田博美, 田中千尋。
- 281回 12月16日(日)スライド大会  
 10:30-16:00 京都市左京区田中樋口町1 田中神社弘安殿。  
 世話人: 上田俊穂<sup>○</sup>, 相良直彦, 吉見昭一, 丸西一枝, 佐々木久雄, 大西裕司, 森本繁雄, 若林万里子, 田中千尋, 稲葉真由美, 橋屋 誠。  
 各自スライドをご用意下さい。
- 282回 2月2日(土)総会および講演会

場所 演題未定。  
 世話人: 藤田博美<sup>○</sup>, 山中勝次, 岩瀬剛二, 下野義人, 丸本龍二。  
 \*詳細は12月頃にお知らせします。  
 右肩の<sup>○</sup>は世話人代表者を表わす。

別紙 8

関西菌類談話会1990年度予算案  
 1990年2月3日

《収入》 単位:円	
繰越金	844,256
会費(400×1,000)	400,000
会場費	40,000
雑収入	60,000
計	1,344,256
《支出》 単位:円	
通信費	250,000
事務費	50,000
会場費	70,000
会議費	60,000
印刷・コピー代	50,000
謝礼	60,000
会報印刷費	124,000
会報刊行諸経費	20,000
振替手数料	2,000
雑支出	60,000
予備費	40,000
事業準備金(定額貯金)	100,000
支出合計	886,000

《繰越》  
 次年度繰越金 458,256  
 (別途に40万円の貯金)  
 会計幹事 寺下隆夫

別紙 9

会報発行計画

- \*会報の内容について:  
 ●採集会報告や今回のキノコ展報告などのニュース  
 ●一般会員が気楽に参加できるコーナー  
 など今後、編集委員会で検討するが会員のための会報だから、皆さんのご意見を戴きたい。  
 ●年2回発行 8ページ A4紙B5はしばらく続けた(中西印刷)  
 ●会員の増加により550部を600部印刷に変更。  
 ●原稿を募集しています。

表紙によせて 山脇誠史  
 かねてよりボルネオ島へ行ってみたいと思い計画していたが、兵庫教員隊のヒマラヤ遠征に参加したのでボルネオへは行けなかった。その時集めた資料の中に1個体のヤコウタケ *M. chlorophos* の写真があ

ったのでこれをもとに熱帯の森の夜をイメージしてみた。ホタルは生殖活動のために発光し、その美しさは人の心をも魅了する。しかし、発光菌は何のために光るのでしょう。

関西菌類談話会会報 No. 7

1990年5月15日 印刷  
 1990年5月15日 発行

編集 関西菌類談話会会報編集委員会  
 発行 関西菌類談話会  
 発行所 関西菌類談話会

事務局 〒618 大阪府三島郡島本町桜井台15-1  
 大阪府立島本高等学校内  
 電話(呼) 075-962-3265  
 振替 大阪 5-83129  
 印刷所 中西印刷  
 〒618 京都市上京区下立売通り小川東入る